

知識探訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

タイ国プーケットの海峡植民地文化

片岡樹（かたおかたつき、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科准教授）

タイ国内でマレーシア的な場所というと、すぐに思い浮かべるのは南部のマレー半島東海岸だろう。しかし意外に知られていないことなのだが、西海岸のプーケットもまた、ある意味で非常にマレーシア的な場所なのである。たいていの人はプーケットの空港からそのままビーチに直行してしまうが、空港から市中心部にバスで向かえば、重厚なコロニアル様式の街並みがわれわれを迎えてくれる。プーケットは自然が豊かなだけでは無い。それは非常にユニークな歴史を背負った町であり、それはそのままマレーシアとの交流を反映しているのである。



プーケット旧市街のコロニアル建築（筆者撮影）

ところで、独立国だったタイにコロニアル様式の建物がなぜあるのか？それは、プーケットの町づくりに際し、かつて英領海峡植民地だったペナンから職人が呼ばれて設計したためである。市中心部の住民も、多くがペナン出身の中国系移民の子孫である。プーケットの町が本格的に開発されたのは 19 世紀の後半で、当時のシャム政府が、スズ鉱山開発のために海峡植民地のペナンから中国系移民の入植を奨励したのがその始まりである。19 世紀後半といえば、海峡植民地を擁する英国が破竹の勢いでマレー半島を制覇しつつあった時期である。英国の勢力が北上してくる前に、海峡植民地の模造品を自前で作ってしまえ、という発想である。このあたりがいかにシャムらしい。

中国系移民の入植奨励に際しては、海峡植民地の華僑社会を牛耳っていた義興会や建徳会といった秘密結社もそのまま輸入された。だから当時のプーケットでは、秘密結社間の武力紛争のたびにペナン側の同胞から援軍が呼ばれ、ペナンで同種の紛争があるときにはプーケットから同胞がはせ参じていた。今からは想像しにくいことだが、ペナンとプーケットはひとつの歴史を共有していたのである。当時の廟（びょう）や学校の碑文にはペナン側の出資者の名があり、また子弟を教育のためにプーケットからペナンに送る習慣も比較的最近まで残っていた。

プーケットの中国系移民たちは、自分たちのことをババ

と呼ぶ。もちろんこれは主に旧海峡植民地で通用する、土着化中国人をさす言葉である。タイ国ではいわゆる華僑華人は総じて同化の度合いが著しいが、ババという呼称が使われるのはプーケットぐらいである。旧海峡植民地で土着化し、その後でプーケットに新天地を求めて再入植していった祖先たちの歴史を、このババという言葉は物語っている。

プーケットがペナンと別々の歴史を歩むようになってからも、そうしたババの文化は受け継がれている。それはたとえば正装としてのニョニャ服であり、海鮮をふんだんに使ったペナン伝来の福建ソバなどである。

もうひとつ、プーケットでは、マレーシアでダト公と呼ばれる神様もあちこちで祀られている。これは主に中国廟で祀るイスラム教の土地神である。マレーシアでは先住者のマレー人に配慮してそうした廟があちこちに建てられたが、その習慣がそのままプーケットに持ち込まれている。ビーチ・リゾートだけではない「もうひとつのプーケット」を求めて旧市街を散策すると、「もうひとつのマレーシア」が見えてくるのである。



プーケットのイスラム土地神廟（筆者撮影）

< 筆者紹介 >

1967 年、東京生まれ。九州大学大学院比較社会文化研究科修了。博士（比較社会文化）。専門は東南アジア研究と文化人類学。プーケットのほか、タイ国北部山地など、タイ国の周縁地域の社会・文化の動態について、近隣諸国を視野に研究を行ってきた。東南アジアと東アジアにまたがる周縁社会と国家との関係、および彼らの宗教のありかたの再検討を研究の主題とする。著書に『タイ山地一神教徒の民族誌 キリスト教徒ラフの国家・民族・文化』（2007 年、風響社）など。